

R-18 Villain×Hero Blnovel

秩序と淫靡オルネイズブレッド

焼肉文庫

カルビ

秩序淫壞オルティブレッド

焼肉文庫

カルビ

プロローグ 警官と怪人、邂逅す……………5

1話 凌辱初夜の闇……………14

2話 恥辱の魔薬浣腸肛……………35

3話 牝へ仕立てられる……………56

4話 淫惨無様転落劇……………74

5話 ヒーロー引退寿退社……………105

最終話 牝妻畜生道……………114

エピローグ 夫婦、相話す……………171

プロローグ 警官と怪人、邂逅す

パーカーを強く引つ張り、頭を隠しながら小走りて人混みの中を行く少女がいた。時折、キョロキョロと周囲を見渡しながら、息を潜めて歩いている。

「そのパーカーのキミ、大丈夫？」

「え」

「顔色悪いけど」

話しかけてきたのは青年警官だった。

少女は周囲に警戒はしていたものの、すぐ傍の建物にまでは気が回っていなかった。彼女は交番の前を通り過ぎようとしていた。

「なんでもないっ！」

「え、あ、キミ」

怖い顔をしているわけでもない警官の前に、少女は真っ青になって逃げだしてしまう。そのことにただならぬ気配を感じ、警官も追いかける。

「キミ、まちなさい！」

「こっちに来ないで！」

パニックを起こして少女は路地裏に駆け込むが、警官も追いかける。

その時、風が吹いた。はらりとパーカーが脱げて、少女の頭が露になる。

「え、キ、キミは一体……」

「あっ——」

少女のコメカミから牛のような角が生えていたのを、警官ははつきりと目にしてしまう。

「こんなところにいたのかマルデйна」

二人以外ない路地裏に老いた男の声。

少女が身を竦ませる。

「……………え?!」

ヴァイン。

警官の眼前、なにもない空間が切り裂かれ、そこから牛頭の男が現れたのだ。

神話のミノタウロスっぽいが恰好はスーツに革靴、洒落た杖を持つ手にはゴツゴツとした純金の装飾品に高そうな腕時計……認識が追い付かない。

「マルデйна、いい歳をして親を困らせるのもいい加減にしろ」

「ッ！ あ、アンタなんかのために！ オルタイプエナジーを悪用だなんて、絶対嫌よ！」

「……ハア。仕方がない」

又も空間が切り裂かれ、ぞろぞろと異形の人型たちが現れる。数はざっと十体程。

「少々力づくで連れて帰らねばいけないらしい」

「そういうことです、お嬢様。ご勘弁を」

「やめろ!!」

怪人たちと少女の間に警察官——星深桜火ほしみおうかが割って入った。異形の存在たちから少女を庇うように立ちふさがる。

「なんだ」

「警察官だ」

「フッ、此方の世界の種族は脆弱だと聞いている。我々に勝てるだけでも？」

「貴様らのことは何も知らん！ だが、怯えている彼女を警察官として、俺は無視するわけにはいかない」

にじり寄って来る異形たちと、人間である自分の力の差はなんとなく感じ取った。あの中の一体に殴られるだけでも致命傷を負うだろう。

（それでも引くわけにはいかないんだ！）

「コレを使って！」

少女が桜火の手に掌に収まる正方形の何かしらのデバイスを押しつけてきた。機械的な装置なのはわかるが、人間社会にはない代物だ。

「こ、コレは？」

「パワードスーツよ！ 体内にあるオルタイプエナジーを利用して身体能力を極限まで引っぱりあげることができ、あいつらと対等に戦えるわ！」

「マルディナ！ オマエ、それは……ぐつ、あの小僧からオルタイプデバイスを奪い取れ！」

「【変身】と叫んでそれでロック解除と使用者設定がされるわ！ いいから、はやく！」

わけがわからないまま事態が物凄い勢いで進んでいく。

それでも襲い掛かってくる怪人たちだけでもどうかしよう、桜火は叫んだ。

「変身！」

【使用者の体内オルタイプエネルギー確認。音声認識確認。身体情報把握。精神安定。オールグリーン、使用者認定。使用者設定完了——オルタイプデバイス・起動——】

デバイスがピカッと輝き、同時に桜火からも紅蓮のエネルギー放たれた。そうして瞬く間に、警官の制服から白銀と紅蓮の装甲スーツに着替えてしまう。

「なんだこれ」

(特撮ヒーローみたいな……)

「おらあ、ソイツを寄越しなあ！」

怪人が一体、殴りかかってくる。桜火よりも巨体から繰り出されるパンチ、受ければひとたまりもないだろう。

【モード・盾起動】

「ッ?!」

「ぐええ!？」

デバイスからの音声と共に怪人と桜火の合間に半透明のシールドが展開される。しかも電流が流れているのか、盾を殴った怪人にビリビリッ! と激しい電撃。

【エネルギー残量九六%】

「気を付けて、エネルギーがゼロに近づけばちかづくほどスーツの防御力は劣化するし、攻撃手段もなくなっていくわ」

「ただでさえ状況をまだ理解できてないのに、難しい話だなあ！」

さらに次々と怪人たちは桜火へ襲い掛かってくる。

「ブチ殺せ！」

「やれえ！」

「この……ファン！」

次々と攻撃をしかけてくる怪人たちを、警官として習った護身術で薙倒していく。スーツの強化機能により、巨体の異形を軽々と巴投げできてしまい、地面へ叩きつけるとアスファルトにヒビが入ってしまう。

(すごいな……いつも以上に体が軽い、そのうえに筋肉の動きが生身の時より鮮明にわかる)

【エネルギー残量六七%】

「普通に戦うだけでもエネルギーとやらは減っていくのか？」

「うん、変身中は何をしなくてもエネルギーは減っていく」

「そうか」

(あその他の怪人たちを従えているミノタウロス……圧倒的に強いだろうな……俺で勝てるかどうか)

部下が全員倒されても余裕を崩さない牛頭の怪人。装甲で防御されている肌に鳥肌がたつ。

「ファン、脆弱な種族のわりにはやるらしいな」

「——ッ!？」

ドンッ!

巨体の牛怪人がその場から消えたかと思った次には、桜火は首を絞められながら持ち上げら

れていた。

(視覚で捉えきれなかった?! 怪力だとは思ったが……なんだあの異様なスピードわ……ぐう……)

「グフフ……。オルティブエナジーを自在に操ることができれば、こうして爆発的な力を得ることができなのだ。数分前までオルティブエナジーの概念も知らなかったオマエにはわからない話だろうがな。さあ、そのデバイスと娘を寄越してもらおうか。そうすれば命だけは保証してやる」

「お、親に……怯える、子、を……家に、帰らせるわけには……いかないだろ……?!」

「そうか、では死ね」

(なんとか、なんとかあの子だけでも助けないと!)

【使用者のオルティブエナジー全開放認証。これより極限解放モード・秩序起動します】

「……?」

桜火の装甲に覆われた右手が輝き、熱い。エネルギーが集まって形になろうと渦巻いている。

(なんだ、わからない、わからないが、体中でお力がか力が渦巻いている。これを逃してはいけない気がする!)

【極限解放まで3, 2, 1……モード・秩序】

「ッ、う？　う、おおおおおおお！」

「ぐおおおおお！」

桜火の右手の手甲にエネルギーで造られた紅蓮の剣が装着され、そのまま思い切り牛怪人の右腕を斬り落とし、さらには右の顔を派手に斬りつけた。血飛沫が飛び散り、そのまま牛怪人は倒れ込む。

「首領！」

「そんなドンがやられるだなんて……！」

部下の怪人たちが悲鳴をあげる。

「グッ……ゼエゼエ……！」

「パパを、アイツを、倒したの？」

「いや、まだだ……あれぐらいで倒れるような男にはとてもじゃないが見えない……！」

【エネルギー残量十パーセント以下。非常に危険】

アラーム音が耳元で鳴りながら、全身を覆うスーツの感触が非常に薄くなっていく。しかも体力も集中力もごっそり削られて激しい疲労感に襲われる。立っているのもやつとな状況。

冷や汗を掻きながら牛怪人のほうを注視する。

「——脆弱な種族だと油断した此方に非があるな」

ゆつくりと、しかし牛怪人は起き上がった。そのまま部下に渡された杖で巨体を支える。

「小僧、名は？」

「……星深桜火」

「我が名はドントレーズ・レ・ジトレ。異次元世界の裏社会を牛耳るメア・ナイトマフィアの首領である。我々はこれから、日本を裏から支配し、それを土台にこの世界を手中に治める。ソレが嫌なら精々死力を尽くすことだな。……グフフ」

杖で空間を切り裂き、それだけ言うのと牛怪人——ドントレーズ・レ・ジトレは部下を連れて消えていった。それから宣言通りこの後、日本には異次元から続々とマフィア怪人たちが現れ裏ルートから日本を支配しようとする侵略行為がはじまった。

そしてこれが両者の因縁の出会いであった。

1話 凌辱初夜の闇

都市部のとあるホテル。

スーツ姿の青年がエレベーターにて特定の手順でボタンを押すと、存在しないはずの階数にむかつてエレベーターは動きだす。

そして、数分後にはエレベーターのディスプレイにB100と階数が表示され扉がひらいた。

「いらっしやいませ」

「お待ちしておりました」

「ようこそ地下の大楽園へ」

「こちらウエルカムドリンクです」

きらびやかなミラーボールに照らされたバニーガールたちに出迎えられる。手渡されたグラスからはアルコールの匂い。ストロットマシンの音が盛大に鳴り響き、ルーレットやポーカーに興じる人々の悲喜こもごもの悲鳴が聞こえてくる。

「……こちら、レッド。メア・ナイトマフィアのカジノへ潜入した」

エレベーターから降りた青年——星深桜火ほしみおつかが小声で無線機へ耳打ち。

メア・ナイトマフィア——異次元から訪れた怪人犯罪組織であり、発達した科学知識から造

られる武器や薬で人間社会を裏から操ろうと目論んでいる侵略者集団。

それを阻止するために、国は同じく異次元から来た協力者の少女「マルディナ」の技術サポートでつくりあげられたパワードスーツを纏い戦う特殊戦闘警察部隊【オルティブレンジャー】を警察組織に新設。

桜火はメア・ナイトマフィアと邂逅、戦闘を経験した最初の人間でさらに警察官ということ
でオルティブレンジャーのリーダー格であるオルティブレットへの任命を受けた。

『了解。一時間後にAポイントでグリーン、イエローと合流よ』

「ああ」

『……アイツに見つからないように気をつけて』

「わかったよ」

通信機越しのマルディナとの短い通信を切る。

（今回の調査でメア・ナイトマフィアの尻尾を掴めればいいんだけど）

正義感から特殊戦闘警察部隊への異動を受けたのもあるが、第一はマルディナが心配だったから。

協力者であるが、メア・ナイトマフィアの親玉であるドントレースと父娘である彼女を危険視する声もあり、見知らぬ場所で親から追われながらも半信半疑に接してくる人間からも守つ

てやりたいと思つた。

(さて、調査をはじめるか)

ここ表向きは普通のホテルだが既に怪人マフィアが裏で買収し牛耳っていることは調べがついている。

今回の任務は、ホテルの地下に違法建築されたカジノから組織に繋がる情報を探ること。他にもバラバラのタイミングと入口から仲間たちが潜入し、途中で合流する予定となっている。

(……と、言っても人が多すぎて歩きにくい)

地下カジノは人で溢れてり、通路を歩くだけで精一杯な状況。このなかで異次元からの侵略者へ利益が流れていくとわかつていて遊んでいる人間が一体何人いるのかと、桜火のくちから溜息がでてしまう。

「……つと、爺さん失礼」

「いえいえ」

対面からきた杖をつくタキシード姿の老人にぶつかりそうになってしまい、慌てて回避する。

(こんな爺さんまでこんな場所で遊ぶのか)

「失礼ですが、エレベーターはどこですか」

「はい？」

「はあ、ホテルの露天風呂からあがって部屋に戻ろうとしたら迷ってしまった」

「……ああ。だったらエレベーターがこちらに」

老人のため来た道を一緒に戻り、バニーガールたちにお辞儀されながらエレベーターに乗り込む。

「で、爺さんは何階に泊まっていたんだ？」

「最上階の百階で……わざわざすいませんな」

「いやいや」

扉が閉まり、地下百階から機体が動きだすと終始二人は無言。

数分かけて目的地の階に辿り着き、チンと軽快な音と共に扉がひらく。

「こりやすごい」

最上階はこのホテルで最も高級なフロアで、大迫力の広々とした大きな窓から都市のビル群の灯りが眼下に広がっており、踏んでいる絨毯の感触すら違っている。

「——で、いつまで人間のフリをしてるんだ？ ドントレーズ」

「……ほお？」

老人の体がいきなり光り、姿を変える。

メア・ナイトマフィアの首領——ドントレーズ・レ・ジドレ。

老いた人外の男であるがその力は衰えを知らず、日本を裏から牛耳ろうとしている怪人。頭は牛、体は人型と神話のミノタウロスを思わせる老牛が杖を持ち、スーツを着込んでいる。純金の装飾品や高級腕時計も相変わらずだが、眼帯をしているのと右腕が義手なところは変わっている。

「一体いつから気づいていた？」

「風呂からあがった言ったクセにドレスコードしているのは怪しいだろ。設定がガバガバすぎるんだ」

桜火は戦うため変身デバイスに手をかけ、同時に地下のカジノにいる仲間たちへ連絡をいれようとした。

「ぐっ？」

（な、んだ、視界が、足が、ぐらつい、て）

視界が回る感覚と同時に指や足腰に力が入らなくなってしまう。立っていられなくなりその場にへたり込み、指先から力が勝手に抜けてしまい変身デバイスを落としてしまう。

「どうやら律儀にウエルカムドリンクを飲んでくれていたようだ」

「あれ、が」

（来る客ぜんいんの飲物に菓を盛るなんてのは、コストがかかりすぎる。かと言って今回のミッ

シヨンは警察でも極々一部にしか知られていない極秘潜入調査だった……ピンポイントで俺を狙ったというなら、情報を流した奴が内部にいたのか」

「我々の取引相手は警察関係者にもいるということだ」

「くそ……ま、て、なに、を、するつもりだ」

力の入らない体を敵首領に抱き上げられそのままベッドへ運ばれる。喋ろうとするが顎にもうまく力が入らない。

「オルティブレッド、オマエは私の娘を誑かした悪い男だ」

「変ないいがかりをつけるな、ぐつ、貴様が嫌がる、実の娘に兵器をつくらせるのが……」

「だが、私と娘は親子なせいかな——どうやら好みが似通るらしい」

ベッドに押し倒され、変身デバイスは奪われ部屋の遠くへ放り投げられてしまう。

「さらに言うと、私には世継ぎがない。勿論、私に見合う番の牝を探してはいたが、みつからなくてな。が、オルティブレッド否、星深桜火——オマエなら私の番に相応しい牝になるかもしれない」

「……なんだと?」

「オマエに初めて会った日。右目を潰され、右腕を失い大量の血を流血させながらも私は、逆に昂ぶりを感じていた。私の目と腕を奪った男を牝として屈服させたい、その強い肉体を独占

したい……番にしたいと激しくオマエを求めた！」

「ふざけるな」

「グフフ……。オマエの意思はどうでもよい。屈服させればいいだけなのだから」

（まずい、ドントレーズはミオクノ族だ！ この種は冗談じゃなく、性別種族関係なく孕ませることが出来る！）

マルデインを通じてオルタイプレンジャー内部でも怪人たちの種族情報は共有されている。

焦るオルタイプレッドへ牛怪人の巨体がそのままのしかかってくる。レッドも日々鍛えてはいるが、百キロはゆうにある巨軀に押しつぶされればどうにもできない。

「ぐう……！」

「そら、口をあけろ」

「んぶう?!」

ぶぢゅり。

老牛怪人の分厚い唇が重なりあう。大きな舌がぬるつと、かんとんに侵入し生臭い獣唾液を飲まされる。

「コレが正義のヒーローとのキスの味か」

「んぐううう……んぶう……」

(確か唾液には発情効果が……まずい……クソ)

ペットボトルの水をムリヤリ飲まされているかのような勢いと量で舌を介して唾液が流し込まれる。既に首周りのスーツはベトベトに汚れて濡れている。

生臭い吐息と共に他者の体液を飲まされる嫌悪感はいよいよに熱に邪魔され薄れていく。

「ずっとオマエを奪う瞬間を待っていたのだ。もつとだ、もつと堪能させろ」

「ぶうっ……ふっぐ、やべっりよはなっんっ!」

「ところで我が娘とのキスは済ませているのか? それとも私とのほうが先か?」

「ぶぢゅやべっんぢゅううう?!」

「その反応だと私の方が先らしいな、安心したぞ」

ようやく解放されかと思ったが頬を鷲掴みされ、ひよつとこ顔に歪まされる。唇からつきでた舌を舌で絡めとり、唇をかるく吸われ二度目のキス。

ただ発情唾液を強制嚙下させられた時と違い、二度目はゆっくりとしたデープキスだった。歯の裏を舐められ、前歯を小突かれながらかるく舌を吸われる。

敵の人外男とのデープキスに、せめてもの抵抗に背中を叩くが薬を盛られたせいで力が入らない状態では筋肉が緩み上手く力が入らない。

「随分な反応だな」

「はあはあ……不愉快な、だけっ、だっ！」

(まずい……唾液の効果がはやすぎる……)

脈拍がじよじよに上がってきた。肉体は急速に性的興奮を目覚めさせていき、体温が熱くなっ
ていく。何より、股間が硬く重く張り詰めてきてしょうがない。

「そのわりにココは興奮しているが？」

「やめろ！ 触、るっふっくあ？」

ズボン越しに撫でられる。

触れられて硬いだけでなく、花芯が射精寸前なほど昂っていることに気づいた。感度も跳ね
上がっており、触れられたさいに電撃が走ったかと思うほどの悦楽が駆け上がり、ヒーローは
声も抑えられなかった。

ヒーローの痴態に怪人はニヤニヤしながら自身のベルトを外す。ズボンからまろびでた剛直
は、成人男性のペニスがちんけに思えるような圧倒的大きさと太さ。脈打つ血管がべつの生き
物にすら見えてくる。

「辛酸を味じあわされつつ恋焦がれてきた相手だ。昂ってしかたがないぞ。グフフ。良い眺めだ」

「やめろお……」

桜火のベルトは引き千切り、乱暴に下着ごとずりおろされる。

互いの男性器も痛いほど勃起し、先走汗が糸を引いている。どちらもまちきれないと言っているような興奮状態。

にゅちゅ……。ぐちゅ……にゅちゅぐちゅ……。

ドントレーズが勃起した剛直を擦りつけてきた。怪人の巨根とレッドの花芯、そのまま互いの先走汗をローションに擦りつけあわされる。

「今宵がオマエの初夜だ星深桜火、存分に愉しみ堕ちるがいい」

「やめろっ、このんぶ、んぢゅううう……！」

強く吸いつかれ三度目のくちづけ。じゅぼじゅぼ、と喉奥に舌を突き立てられながら、肉棒をすりつけられわざとらしく獣臭い息を吐きかけられた。

「グフフ。何からなにまで、私の牝妻として躡けてやるぞ。まずはこの口だ、この唇から喉までをな、フェラオナホドールに変えてやるわ。牡のモノ啜えただけで絶頂してしまうようなド淫乱のくちマ×コにな」

「んぶ、ごっろお、んぶっぐううう……！」

じゅぼっ。じゅぼっ。じゅぼおぼぼぼっ。

催淫唾液を腔内から喉奥に塗りたくりながら、舌を肉棒に喉を肉穴に見立てて犯してくる。

にゅちゅぐちゅ……。

そして腔内凌辱にあわせて兜合わせ。互いの亀頭が触れ合うだけで桜火の腰は跳ねてしまい、熱い鉛がどんどん溜まっていく感覚を覚えた。

(まさか……アレ、からも催淫体液がでてるのか?!)

「そら」

「んつぶうつぐ!」

ドツビユビユツバツ。ポツビユ!! ブツブるうるウウウウウウウウウウウウ!!
舌が咽頭を突いたと同時に射精してしまう。快感に足腰が跳ね股を汚す。

さらにドントレースも射精する。怪人の吐精は爆弾が爆発したかのような勢いで、人間の成人男性とは比べ物にならない。レッドの全身に飛び散り穢してくる。

「ハアハア……くそお……」

「腔内でもイッたな? オマエの口はこれからただの口ではない。ド淫乱な牝のくちマ×コになつたぞ。これからキスするたびに、今宵の初夜を思い出し、口で果てれば牝チ×ポが疼き、牝チ×ポが射精すれば口が疼いて仕方なくなる」

「……適當、を言うなつ。ふーっ……ふーっ……ふーっ……」

耳元で獣臭い息を吐かれながらの嘔きへ。睨み返すが、マフィアのボス怪人は笑って耳元で囁いてくる。

「時間はたつぷりとある。オマエの精神を挫き歪ませるにはたつぷりのな」

「どれだけ時間をかけようが、俺はオルティブレッドとして貴様には屈しない」

（約束の合流時間は一時間。時間になっても合流場所にこない俺に異変を感じ取った仲間が探しに来るはずだ）

時間まで耐えれば、マフィア怪人の首領と自分たち五人との戦いへ発展し、勝算はあるとオルティブレッドは確信していた。

「おおそうだ。一つ言い忘れていたことがある。実はこの部屋には特殊な装置を設置していてな、部屋の外と中で流れる時間が違うのだ」

「……なんだと」

「部屋の外の一秒を、部屋の中では一時間や一ヶ月と設定すると、実際に肉体で感じる時間経過を狂わせ、一時間、一ヶ月と錯覚させる」

言われて部屋をざつと眺めると、床と天井の四方の隅に計八つの機械が設置されていた。火災報知器よりも二回り大きなセンサーライトが一定間隔で部屋中をスキャンしている。

「フン。ムダなことだ。そんな機械を使おうが、俺は貴様に屈しないし、どれだけこの部屋の時間を引き延ばそうが、外から俺の仲間が突撃してくればそれで終わりだ」

「そうか。ちなみに私はオマエが孕むまでこの闇から出す気はないぞ」

そのまま桜火の足を掴んでひろげ、自身の指を舐めてから尻の窄みへ這わせる。

「……っ」

ぐぢゅ。涎塗れの指一本だけだが、ドントレーズの指はそもそも太くて大きい。そのうえ、ゴツゴツとした指輪をしているから、尻穴が一気に二センチも広がってしまう。

「キユウキユウと私の指をくいしめて……まるで餌を強請る雛のようだな」

「黙れ……!」

「だが、うむ少々キツすぎるな」

目の前に見せつけられたのは小さな金属チューブ。一見すると軟膏薬に思える。

「なんだ」

「オルティブレンジャーが探していたブツがあるだろう?」

「まさか、ピットフオールヘブン」

金属チューブの正体は巷で流通している魔薬【ピットフオールヘブン】。

メア・ナイトマフィアが売り捌いている薬物の一種。麻薬と違って使用しつづけて命を落とすことはないが、それでも激しい快樂依存に陥りその薬欲しさにナイトマフィアへ多額の金を支払ってしまう恐ろしい非合法薬。

「ああ、そうだ。直腸吸収はあつという間に味わえるぞ? そら」

薬を塗った三本指が、アナルのなかへ。

太い指と指輪の圧迫感に苦しみながらも、魔薬に触れた肛門粘膜が熱く燃え狂いだし、息が無意識にあがってくる。

「どうだ、その身をもって味わってみるのは？」

「や、なつんだコレえ、ふっほお〜!! なつ、んだ、熱い! 熱い! 熱い!!」

「散々私の唾液を摂取したのだ。相乗効果もあって効き目はすぐだろう……おおう、先程よりもヒクヒク吸いつてくるではないか。愛らしい牝尻マ×コだ。とりあえず、もう一度イケ、尻穴で気持ちよくなることを覚えるがいい」

「くう?! あ、ああああつら、らんつらア!」

ゴリッ。ぐり、ゴリゴリイ。

直腸壁を隔てて前立腺の場所を探り当てられ、刺激される。さらにもう片方の手で花芯に薬を塗られてしまう。

「ふっぐう……んっぐうううう! や、やめ、やめつろお、手、手をどけろお!」

「真っ赤になって脚をくねらせているぞ。そうとうイイらしいな、そうだと覚える刻み込め、イケ」

(ま、また……ッ!)

ゴッリイイイイイイイ!!

潰してくる勢いで指が前立腺を圧してきた。それに合わせて魔薬塗れの花芯がバキバキに硬くなり、一秒の我慢もできずに奥から熱が駆け上がってくる。敵の手でいいように二度目の射精。

ビュッる!! ブッビュるるるぶつぶびゆるうううう!!

「ンアアああこつろ、こつろおおおおおお〜!! ンヒッ、ハア! ンアア……」

「牝尻で絶頂したな? コレから射精するたびにこの牝尻でイッたことも思いだすのだ。ククク、そのうち射精するだけで淫らに肉体が牡を求める。淫らな感情になるだけで牝チ×ポを勃起させて、射精してしまう変態牝となる」

(誰がなるか、そんなおぞましいものに!)

「さて、ある程度ほぐられたなら本番といこうか」

「……………ひっ」

ドントレーズの肉棒がさらに膨張する。ポコポコ、と膨張と同時に竿の表面に真珠サイズほどのイボが浮き上がり、ペニスの表面にさらに小さなペニスがあるよう。桜火は冷や汗がとまらない。

「安心しろ。今後私の妻として孕み袋の務めを果たすのだ、種漬けセックス交尾がトラウマにならないよう、痛みなど感じないようたっぷり薬を塗ってやる」

自身の怒張にたつぷりと軟膏魔薬を塗ってから緩んだ肛門孔へ亀頭が押しつけられた。

ぶぢゅ……ぐぢゅ……ぢゅつぶ、ぢゅぶううううううううううう。

「お……ンツうつくうううう……!!」

(い、意識がトぼう……く、苦しい……)

薬が塗られているので挿入はスムーズだったが、指以上に怪人ペニスは大きく太くそもそもアナルセックスなど初めての桜火は内臓が潰されるかのように苦しさを味わう。

「ハア……!! ハア……!! ふつくうううううううううう!!」

「おお、いいしまりだ……!! やはり鍛えているだけあるらしいな」

「ハアハア……やめ、もうっんぶううう?!」

口の周りの涎がようやく乾いてきたのに四度目のキスでまた涎でベトベトに汚されながら、飲まされる。上下の肉穴が液体で昂らされていく。

(か、体が……苦しいのに、熱くて……疼く……頭空っぽになり、そ、う……)

「ぐふふ、ハハハッ! どうだ、牡の味は? オマエの牝穴を犯す、牡チ×ポの味は? ずいぶんと旨そうに啜えこんでいるが、ううん?」

「うるさ、いんッホおおおおお?! ひゅつくんつくアあ。あ。あ。あ。」

ぐつぶおおおおおお!! ぶつぢゅうううう……ぐぢゅぐぢゅつ。ぐつぶおおおおおおお

おおお!! ぶっぢゅうううう……ぐぢゅぐぢゅっ。ぐっばおおおおお!!

疣を擦りつけられながら力強く、ゆつくりと味合わせるように肉棒を引きずりだし、また力強い一撃ピストンが繰り返される。

催淫涎と薬で散々下拵えされたヒーローの苦痛はあつという間に吹き飛び、火花散るような快楽のスパークに襲われはじめた。

「っおっほおおおお、お?? ふ、ふっがっ……ふっがいいいい!! っおおおおおおゴリゴリイイイぐるううりやアアアア!!」

(トぶう!! ドントレーズのが、一突きくるだけでえ……意識も、体の奥も、なにかもがっ!)
「あ、ああ、やべ! やべっろおおお……んっほおおおお!!」

「そう言っつて絡んできているのはオマエの方だぞ、桜火」

「ふえ、あ?」

種漬けプレスの体勢で押しつぶされている桜火は、肛悦をやり過ぎそうと無意識に逞しい首に両腕を回して、腰に脚を絡めて抱き着いていた。まるでヒーローの方が怪人にねだっているよう。

「ち、ちがつっくんほおおおっ」

「孕ませてやる!! 牝にしてやるぞ、桜火ア! 私の所有物になるがいい星深桜火あ!!」

グボオオオオ〜。

肉棒が直腸よりもさらに奥、S状結腸にすら犯し貫きだし目を点にしてしまう。そのまま、怒張がぶるりつと震え、一気に子種を吐き出した。

どぶぶつびゅぶ…:ポブゆつびゅぶウウウウブオオオオぶつびゅぶううぐつびゅぶぶぶぬりゆうウウウウウ〜!!

「~~~~~ツツッお♥」

巨体に押しつぶされながら怒濤の白濁を注がれると、まともな悲鳴をあげることもできなかつた。ドロドロの怪人ザーメンが粘膜に触れた途端、脳内中枢核からドバドバと幸福物質が溢れだす。溢れだして訳が分からない。

「ンっほおおっひっぎイイイイイイイイ?! イ、イグううウウウウウウ♥♥♥ あっひ あっひゃンッピョオオおおおおお♥♥♥ ら、らんつらごりええええ♥」

ピクピクウツ! ブツツぢゆるウブバア!! どつびゆるううううう!

抱き着いている四肢が痙攣し結合部からは直腸汁を噴射しながら花芯は二度目の射精。

「私の種族が唾液に催淫効果があるのは知っているだろうか? 精液にも孕ます牝を逃がさないようにさらに強力で中毒性の強い、催淫効果があるのだよ。牝が自ら子を望むように、中出しされるだけで凄まじい快楽を与えることができるのだよ」

3話 牝へ仕立てられる

実際の時間では数十分経過しただけだが、時間調節装置により感覚を狂わされているオルテイブレッドこと星深桜火ほしみおうちかの体内時計では既に数カ月は経過していた。肉体の時間間隔は時間装置に騙されて爪や髪の毛が伸びが早い。

「ようやく髪も伸びた」

「……………」

「常に身綺麗にするのは牝の義務の一つだからな。此処にいる間は私が教えてやるから牝化粧の仕方はしっかり覚えるのだぞ」

長く伸びた髪をマフィア怪人の首領ドントレーズ・レ・ジトレが櫛で梳かしている。

ドントレーズは、執着している青年が振じれた時間と共に牝へと変化していくのが楽しくてしかたがないのだ。

「そら、顔をあげなさい」

「……………」

のろのろと顔をあげて鏡を見る。

桜火はやけに大人しい。言われるがまま黙って化粧台の椅子に座わっていた。

「最初の頃は抵抗してきたが、今では随分と従順となった牝のために着飾る悦びを自覚してきたか？」

「ち、ちが……うんっ……」

化粧水を染み込ませたコットンで顔を塗られる。

次に乳液、ファンデーションも丹念にと、次々に顔に塗られていく。

頬をチークを筆で彩られ、ビューラーで睫毛をくるんつと丸められ瞼の上には派手なラメ入りのアイシヤドゥ。

「ま、また……この、口紅……んっう」

(化粧をされるだけで……体が疼く……！)

リップブラシで紅をひかれるだけで唇がムズムズとしてしまし、化粧水の甘い匂いを嗅ぐと軽い酩酊状態でふわふわとしてしまう。

化粧水から口紅まで化粧品のなかには魔薬ピットフォールヘブンが混ざっているのだ。

オルティブレットはこうして決まった時間に必ず化粧を施されることで魔薬強制吸収させられしまっている。

「ああそうだと。こうすればオマエは毎日化粧したくて堪らないだろう？ おかげで、化粧するだけで牝を欲して発情している立派な牝顔になるというわけだ」

「そんなわけ……ううっ」

否定しようにも渴きに意識が引つ張られ強くでられない、さらに脂汗がじんわりと浮かんで
いる。

化粧が終われば次に女装を強いられる。

漆黒のマーメイドドレスはスリットが深く入っておりガーターベルトをした脚が見え隠れする。耳飾りをつけ、二の腕まで覆い隠す黒色の手袋をはめる。踵の高い靴を履かされるが、ホテルの部屋に閉じ込められてからずっと履いているので歩くぐらいなら慣れた。

下は何も身に着けていないので、勃起した花芯が TENT を張っているのが丸わかり。全裸でいるほうがまだマシだと思いが逆らう気力が沸かない。

ギョルギョル……ゴロゴロ……ギョルグルルウ……！

「う、うっくう……ハッハッ……」

着替えが終わると腹の中から大きな水音に思わず腹を抑える桜火。脂汗が化粧したばかりの顔にたつぷりと滲む。

大人しく化粧し服を着るようさらに薬漬けにして逃げられないようにするため、化粧するよりも前に桜火はたつぷりと魔薬浣腸を施されていた。

「ハッハッ……！ ハアッ……！」

「トイレトレーニングは、ほぼ一日で完璧にマスターできたからな」

調教初期の頃に、化粧と女装が終わるまでは絶対に排泄行為は許されず、何処で排泄するかをマフィア怪人に徹底的教え込まれたヒーローは短く浅い息をしながら四つん這いで部屋の隅に敷かれているペットシートの場所まで這って進む。

「初日はこのラグに盛大に漏らしたというのに、いまでは上手にできてオマエは優秀な牝だ」
(人をバカにするのもいい加減に……ひぐう)

這って進む道には必ず、調教初日の魔薬浣腸で汚したラグが敷かれたままなので、ガビガビに乾いて汚れたままのが目に入るたびに桜火の羞恥心をチクチク刺してくる。

汚れたラグを這いずり壁際までくる。真下にはペットのトイレシートが敷かれていて、ココがオルティブレッドのトイレで、当然敵の老牛に見られる。

「掴んでなければ汚すぞ。着替えはナシだからな、一日中汚物塗れの服装が嫌ならしっかり握っていろ」

杖で器用にドレスを捲られ羞恥に顔を歪ませつつ、トイレシートの真下でドレスを口に咥えて壁に手をおき、腰を下ろして尻を突きだしながら大股で自らの尻たぶをわりひらく。

「ハッハッ……ふうう〜！」

(あ、ああつ、体がもう躡されてココにくるともう勝手にとめられない……)

毎日毎朝（正確には数秒ごと）の習慣に体は慣れ切ってしまったている。

浣腸され化粧と着替えをしたのち、トイレシートまで這いずってから排泄行為のルーチン。

「んっうううふっく♥ ふっくううううう♥」

肥大化した菊皺が捲れ返り、ぶちゅっ！ と直腸粘液が噴き零れる。腹の奥から硬く多大なトロトロの塊が勢いよく下り滑って落ちてくる感覚に鼓動が昂ぶり、体の芯まで蕩けていく。

（い、嫌だ！ 嫌なのに、我慢できない、とめらつれな、イ……！）

「んっぶ♥ んっくうううっぶううううっ♥」

ぶぢゅぶぼぼぼぼっ！ ブツヂユブツリユリユツリユブヂユブ！ ぶっぼぼ
ぼおおおおおっ！ ブツリユブツリユブツヂユツヂユウウウウウッビユブウウうう！ ぶっ
ぼおおおおおおっ！ ブツリユぶっぼっビユツブツリユブツリユぶりゅぶりゅっ！！

激しい恥辱音を響かせながらケミカル色の疑似便が押し出されていく。菊皺を擦られる摩擦
快楽に膝がガクガクとバネ仕掛けのように震えるので、大尻も上下に揺さぶられケミカル便も
上下に動きながらの排泄になってしまう。

（み、みられてれるっ、しっかりと！ ドントレーズの視線かんぢりゅ、浣腸漏らちでりゅど
ごっ、あ、ああ……！ ぐりゅ、アレもぐりゅううう！）

じよぼっぼぼっぼおぼぼぼっ！ ジョロロロロっ！

じよぼつぼぼつぼおぼぼぼぼ〜！ ジョロロロロ〜！

放尿が壁に跳ねかえって、せつかくくちに啞えたドレスに跳ね染みが次々できてしまう。

(漏らしているともみられつりゆうううう！)

「んぐうううっ」

排泄快樂で転んでしまいそうになるが、壁に頭を押しつけてバランスを必死にとった。疑似大便と小便が終わってもぼつかりと開きっぱなしのアナルを見せつけながら姿勢はそのまま、必死に嘔んでいる部位の生地が涎で濡れている。

「ふーふー……うーうー……ふーふー……」

「小便の染みが数個か……まあ、及第点だな。すつかりクセになってしまったな。いいことだ。牝妻らしい、いやらしい尻の感度だ。……そら、終わったぞ」

下の処理をされながら囁かれ耳が紅くなり、最後に尻を叩かれ膝が内股になってしまう。

「では朝食だが……おや？ たかだが食事で興奮したのか」

「……………」

じゅわつと涎が紅を塗ったばかりの唇を濡らし、股間にも熱が集まると勃起した花芯がスカートを押し上げてきたので手で隠す。

ミオクノ族の中毒唾液混じりを口うつしされるせいで、食事の時間になると腔内から喉奥ま

4話 淫惨無様転落劇

疑似的に肉体感覚だけでは半年は経過している。

「くう……ふーっ！ ふっううう！」

ホテルの寢室、淫らな音にあわせて甘い声を抑えようと必死に噛みしめているオルタイプレッド。ベッドの上、一糸まとわぬ姿で土下座に近い姿勢でマフィア怪人の首領ドントレーズ・レ・ジトレに犯されていた。

「ぐふふっ。これほど牝にちかづいておいて、いまさら我慢する意味もないだろう」

むにゆう。

鷲掴みされた臀部は一時間もたたないで、西瓜を二玉並べたような巨尻に変貌していた。皮下脂肪をたっぷり蓄えてむっちりと実り育っており、まるで経産婦のよう。

「それともコチラのほうがいいか？」

バチイン！ バチイン！

怪力自慢の牛怪人による平手打ち。汗でぬめり光る臀部があつという間に真つ赤な手跡だらけになる。

「んっぎゅううううううっ♥」

(痛い！ イタイツ！ 痛いのにいいいぐう♥ ケツマ×コの奥にジクジクぐりゆうううう♥)
尻を叩かれただけで全身の骨が粉碎されたと錯覚するぐらいの痛みが走るが、それを上回る骨身に染みる快樂に抑えていた声が我慢できずに鳴いてしまう。

「マズ牝ヒーローは旦那様に牝尻をいじめてもらって気持ちがいい——と言ってみる」

「あ、アああ……」

「言ってみろ、そら」

むぎゆううう。もにゆうううう。

赤く腫れた尻肉を大きな指が、涎塗れの指が揉んでくる。発情促進効果つきの涎を染み込ませるように丹念に揉み回され痛みと熱、疼きが増していく。

(あ、アアアツ！ ダメ、だ、ダメなのに！ 熱すぎてなにも考えられない……！)

「き、きもちいい、きもちいいですう！ マズ牝ヒーローのレッドは旦那様に牝尻をいじめてもらってきもちがいいですうンツううう……！」

「ほお？ コレか？」

「ンキヤア♥♥♥」

ギユウ！ 抓られ、みつともない表情で痛悦で絶頂してしまう。

ドントレーズの罫に嵌ってからまだ一時間も経っていない。

が、時間調整装置によりオルティブレッドの心身の感覚では、既に怪人マフィアに犯されて半年間経過している。

ミオクノ族の特殊体液を長時間与えられ桜火の心身は牝として屈服しつつあった。さらに魔薬ピットフォルヘブンを使われると背徳感と罪悪感に陥り、そこへ快楽を与えられると逃げるように溺れてしまう。発情した身に痛みと快楽を同時に与えられマゾヒズムすら目覚めつつある。

「そら、牝妻として相應しい言葉を教えただろ。言ってみろ」

バヂユン。ばぢゅんっ。バヂユン。

リズムカルなピストン運動。すっかり牝穴として成熟したアナルは、小突かれるだけでもアナルアクメに酔いしれてしまう。擦られる菊皺が蕩けてしまいそうになりながら牡棒を絞めつけあの催淫精液を強請ってしまう。

「ああ〜♥ 旦那様に牝尻いじめられて、桜火イク♥ いぎますう〜♥」

（こ、こんなこと言いたくないのに！ おっおおっ♥ し、尻を犯されると、もう、意識がグチャグチャ掻き混ぜられて、わけわからなくなっへんっほおおおっ♥）

「そんなに尻をいじめられるのが良いのか？ なら……」

ずるっ。肉棒が引き抜かれるとアナルが立派な薔薇肛門を咲かせたまま閉じることができな

い。長い間犯されていると勘違いしているレッドの肉体は、縦割れアナルをあけたまま閉まる
ことができなくなってしまった。

「ハアハア……そ、それは……」

「もつと気持ちよくなりたいだろう？」

ずりゆ。ずりゆずりゆ。にゆるんつ。

ピットフォールへブンを塗った肉棒が尻谷間に擦りつけられる。魔薬に菊皺が擦られるだけ
で、淫熱が腹奥から炙りだされ直腸汁が滲みだしてしまう。

（あ、アああ……め、牝穴ア！ 旦那様の牡チ×ポで淫乱ト変態牝ヒーローの牝穴に……ち、
ちがう！ ダメ！ これはダメだ！）

「や、やだ……やめろ、コレはダメ、ダメなんだ……」

「腰を揺さぶりながら言われても説得力がないぞ」

「ハッハッ……！ くあ〜！」

ぬりゆぬりゆ。ぐちゆぐちゆ。ぬちゆう〜。

腰を上下へ動かす格好を怪人がせせら笑ってくるが、オルティブレッドは気にしている余裕
もない。へブンピットフォールを塗った牡槍は尻谷間を愛撫するだけで、緩みっぱなしの肉孔
へ挿入されないのだ。

(あ、ああ、ダメ、ダメ！)

「ぐ、ぐう……！ ふつぐうううう！」

涎を垂らしながら唇を噛みしめ、拳を握るが焦燥感は膨れ上がっていく一方。禁断症状の震えも発症しだす始末。

「我慢は体によくないぞ？」

パアシン！

小気味良い音が部屋中に響いた。桜火の臀部にくつきりと手形がついている。

(お、おおつ、め、牝尻 た、たがれつりや……！)

「薬を塗った手で叩いてるからな傷から染み込んで気持ち良いだろ？ もっと味わいたいだろう？ ん？」

「お、へ、アツ、や、やべ〜〜〜ツ♥♥♥」

パアシン！ パアシン！ パアシン！

弾む音と一緒に心地良い鈍痛が骨身に浸食していく。ジリジリとした熱痛が臀部全体へゆつくり広がっていく。

(い、イグう！ マゾ牝尻叩かれでいぎゆううう〜♥)

ぶぢゅつ。ぶぢゅつるるるつ！ ぶつぢゅぶつばつ！

明後日の方向に視線がとんで、唾液と鼻水をとばしながら喘ぐ。腸粘膜にじわじわと薬が溶けだせば五臓六腑を、神経を、脳を、骨を、肉体の内側すべてを淫熱波で焼き尽くされる感覚に囚われる。そしてこの灼熱淫獄が病みつきになってしまっていた。

「そら、孕め！」

どぼぼぼぶつぶつびゅぶぶおおおおおおぶぶりゆるるるるる!! うるるううう~~~~!!

「~~~~~あ——ッ♡ いぐ♡ いぐいぐいつぐううう♡♡♡ 旦那しやまの牡つよザーメンはいっでぐつりゆうううううう♡♡♡」

注がれる白濁熱に思考も理性も記憶も真つ白なスパークに焼き尽くされていく。魔薬による灼熱アクメと特殊精液による催淫種漬けによる快樂がヒーローを支配し、さらに一步墮落させていく。

ぐぼお……。ぶつぶつびゆるうぶつ!

肉棒が引き抜かれると、怪人ザーメンが勢いよく噴射されオルティブレッドの尻谷間が精液の川となり、ベッドを濡らした。

「はあ……はあ……」

（こ、このままだと、ほんとうに……ドントレーズに墮ちてしまふ……な、なんと、か逃げない、

と……)

「さて、綺麗にしてもらおうか」

「……………くう」

ベッドからのろのろ起き上がる。疲労で鈍いのもあるが、尻同様に乳房も大きくたわわな釣り鐘型に膨らんでしまっている。胸以外にも太腿も腰回りも、女性のように丸みを帯び、女性以上にやらしく肥えてしまっていた。

オルタイプブレッド本人の肉体が枷になり俊敏に動けなくなってしまうているのだ。

「そらどうした、旦那のモノを綺麗にするのは牝妻の務めと教えたはずだぞ」

「わかった、わかったからやめあつひ?! ふつきゃん! んつくうううう〜♥」

ぐい、ぐい、ぐい〜。

親指なみに太く伸びた乳首には、ドントレースの手首を裝飾しているアクセサリーと同じリングが乳首を貫通し、さらにリング同士は鎖で繋がっている。その鎖を引つ張られると左右の乳首が引つ張られ痛悦に貫かれる。乳首責めから逃れたい一心で重たくなった体で素早く動いて、マフィア怪人がベッドの淵に大股ひらいて座っている間に座り込む。ふくよかになりすぎた乳を寄せて、肉棒を挟み込んだ。

(くっ……………酷い匂いだ。たっぷりのドロドロ精液で気持ち悪い…………)

「ほれ、そら」

「や、やめつろお……」

ドントレーズが軽く腰を突き上げる。乳谷間を精液で濡れた熱塊の感触と、亀頭がレッドの鼻穴に押しつけられたさいの臭から、強烈な牡を感じとり酩酊してしまいそうになってしまう。レッドはそれを振り切るように肉棒へ吸いつき口奉仕をはじめた。

「ぢゆるっ……ぢゆるっ……ぢゅぶぶっ……」

亀頭を舐めながら左右の乳を圧迫しながら、大きく上へ下へと動かし乳肌をタオルのようにしてザーメンを拭いとる。

「あぶ……ぢゆる……れろ、れろぢゆるるるっ」

「最初よりも上達したな。ところでマルディナとはこんなこともシていないのか？」

「ぢゅつぶっ、やめろ。あの子はなにもっ、ぢゅぶるるっ！ 関係、ないっんぢゅぶっ！」

「なんだ、シてないのか」

「しゅ、しゅるわけ、ないらつろ！ ぢゅぶっ！ 彼女とは、なんのっ、関係もらいんらかあび」

「ほお」

ぐにいいい。ぐにゆううう。ぢゅぬうううう。

早く終わらせたい一心でせわしな乳袋を動かす。頬がへこむほどの勢いで亀頭へ吸いつきな

がら、ずるう〜つと喉奥まで咥えこみ舌で掃除していく。

「んぢゅ……ぢゅぶぶつ……ぢゅつるうううう〜〜〜！」

（はやく、はやく終わらせないと！ 射精されたらまた催淫体液を浴びることになる！）

ぶるんっ。ぶるんっ。

乳房が動くたびに乳首も動き、貫通しているリングも勢いよく上下する。遠心力の威力が乳首を刺激してくるが気にしている場合ではなかった。

「よしよし、随分と綺麗になったな。褒美にかけてやる」

「え、あ、まつ——」

ドッビユっぶるうるるりゅウウウウウウウウ——！！

拒否する間もなく、衰え知らずの二度目の射精。正義のヒーローの顔面を白濁が穢し尽くしていく。

「くうあああふっひいいいいいいいいいいい♡」

（く、くしゃいいいいい！ 濃厚牡フェロモンが鼻穴にグーンとぐりゅううううう♡ 脳みそグラグラぢでぐりゅううううう♡♡♡♡）

「そら、オマエもイクがいい」

「ンツキイイイイイイぎいい♡♡♡♡ いっいっくうううう♡ 鼻穴も、乳首もいっばいいいっ

ぐううう ♡♡♡

グイ！ ぐにいいいいい〜

リングを引つ張られ、これでもかと乳首が真つすぐに伸びる。牡牛ザーメン臭に鼻を犯されながら、敏感となった乳首を苛められるとアナルセックスで絶頂したばかりの牝肉をギン！と背筋を弓なりに反らして数秒硬直したのち、倒れ込んでしまう。

「はあはあ……ああ〜……」

「今度は私が綺麗にしてやろう」

倒れ込んだレッドの前にドントレースが仁王立ちし、ペニスをむけてきた。

「ぎゅっ?!」

ぶっしやあああああああああ〜

黄金水をぶっかけられ、強烈すぎるアンモニア臭に包まれる。ザーメンと尿と因縁相手のあらゆる男の汁で汚し尽くされる。

（お、牝の匂い……♡ だ、ダメだ……は、はやく、逃げなければ……じ、自分がじぶんでなくなる……牝になってしまう……）

オルティブレットは焦燥感に駆られつつ、蕩けて呆然としたまま動くことがしげしげできなかった。

.....

RRRR！ 部屋に備えつけられている電話が鳴った。

「どうやら地下フロアにいるオマエの仲間たちが異変に気づいたらしいな」

「……！」

（合流できればなんとか……）

「オマエはアジトへ連れていくが、その前に——入ってこい」

ドントレーズの命令と共に扉がひらき、マフィアの部下怪人たちが手に浣腸器を持ちながら入ってきた。目の前で見せつけられる浣腸器の中身は薄紫色の液体に黒い粒が入っている。

「かつてオマエに痛い目に遭わされた者たちだ」

「な、なんだ……」

「ぐふふふつ、オマエのエナジーを搾りだすのを手伝ってもらおうと思ってな。アジトへ連れていく途中で反抗されても面倒だ。オルティブエナジーを一度すべて吐きだし無力化させてから連れていく」

（オルティブエナジーを吐きだす？）

マルデイナから、エナジーとは体内を巡っている目に見えないモノなのだとして最初に教わっている。それを吐き出すとはどういうことなのか、と訝しむ間もなくレッドは部屋に備え付けられているテーブルに四つん這いの格好のまま手足を枷と鎖で固定してしまった。

「部下たちが持っているのは、ピットフォールヘブンでつくられたエナジー凝固剤。これを浣腸されるとオルティブエナジーが固化化され排泄できるようになる——勿論、尻穴から」
「なっ……!」

尻穴からオルティブエナジーを排泄する、それもマフィア怪人たちと戦うための大事な力を、よりもよって怪人たちの前でヒリだす——あまりに恥辱的な行為。

「おっと、動くなよ オルティブレッド!」

ズブリ! 浣腸器の先端がアナルへ挿入され、恥知らずな肉花は肉棒と勘違いしてギューグ्यूに器具を絞めつけてしまい、そのまま一気にシリンダーが押され魔薬でつくられた浣腸液が注入されてしまう。

ズチユチユウブヂユウウウウウ~~~~~!

「~~~~~ツフオオオあっぢゅいいいいい!?!」

薬そのものは冷たいはずなのに、粘膜に触れた途端、痛いぐらいの灼熱に襲われる。ぶわつと汗が滲み、逃げようともがくが鎖がカチャカチャ鳴るだけ。しかも一本では終わらない。

「おらよっ！」

「くおおおおつほおおおおおおおおおおおおおおつん！」

ズボ！ ズヂユヂユブウウウ——！ ギュルルツ！

すかさず二本目を叩きこまれ薬を浣腸させられた。獐猛な便意が襲ってくる脂汗が滲み背筋が震える。

「まだ半分もおわってねえぞ！ おらあっ！」

「あ、あつぐぢゅおつお、おほおおおお——?!」

（こ、壊れる、裂ける！ 腹が裂けるううう！）

ズボ！ ズヂユブヂユウウウ——！

浣腸三本目。腹痛と便意、圧迫感に苛まれ汗は滝のようにとめどなく流れて、咆哮のような喘ぎ声をだしてしまふ。

「おいおい、ヒーローがこれぐらいでへばってんじゃねーよ！」

「ハッ、あ、ああ、ま、やめっひっひっくやめ、やっべっぶうううっばおおおおこ」

ズボ、ズヂユぢゅっヂユウウウウウウ——！

ジヨボぼぼぼ——！ じよおおおぼぼぼおお——！

容赦ない四本目。白目を剥きながら浅い呼吸を繰り返し、テーブルの上でしゃがんだ体勢の

秩序淫壊オルティブレッド

感想をいただけると嬉しいです☺



2024年3月1日発行

著者 カルビ
発行元 焼肉文庫
連絡先 Mail karubidouzinn@gmail.com
Twitter NiKuZiRu2022
Pixiv 12050686

※この本は個人の趣味によって作られた同人誌です。作中に関する内容はフィクションであり、実在のものとは一切関係はありません。本書を複製・複写すること、インターネットやSNSへの無断転載することは禁止いたします。許可なく同人誌を不特定多数の方が閲覧可能な動画サイトにて投稿したり、朗読配信することは絶対におやめください。